

〈持続〉と〈合意〉の社会学

—西原和久氏の〈意味の社会学〉から考える—

Which Way toward Sociology with a Focus on “Sustain” or “Agreement”? : Thinking through Kazuhisa Nishihara’s “Sociology of Meaning”

中央大学文学部教授

首藤明和 SHUTO, Toshikazu

1. 〈持続〉の蓋然性と〈合意〉の非蓋然性

最近10年あまり、中国雲南回族ムスリムを対象としたフィールドワークをおこなってきた。テーマは雲南回族の共生の作法である。この問題関心の背後には、さらに大きなテーマとして、イスラーム世界を排除しない惑星社会の実現に向けた課題と展望を考えることがあった。プラネタリー・ソサイエティを惑星社会と表すのは、地球への自己準拠も、宇宙のなかのひとつの惑星という視点から相対化したいからである。

フィールドワークを通じて、多様な歴史や文化、異なる信仰をもつ人びとのあいだの共生について考えを巡らせていたのが、いつのまにか、「時間というパラメータを軸にして展開される壮大なシンフォニー」としての生命の姿（茂木 2020: 30）に魅入られ、そのなかで、社会や人間の〈持続〉が深化していること、その一方で、自己と他者の〈合意〉の形成は、ますます非蓋然的で困難になりつつあることへの思いを強くしていった（Luhmann 1984 = 2020）（首藤 2020）。そして、蓋然的な〈持続〉と非蓋然的な〈合意〉の両者は、社会の〈個人化〉、すなわち〈親密な関係の深化〉のなかでの個人的なことからへの関心、それへの社会的な承認、その組織的な支持（Luhmann

1982 = 2005）によって¹⁾、繋ぎとめられているのではないかという見解を抱くに至った（首藤 2021）。

ここで皮肉っぽく連想するのは、持続可能な開発目標（SDGs : Sustainable Development Goals）である。周知のように、これは2015年9月、国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載された、17の目標と169の対象から構成された国際目標である。地球上の誰一人も取り残さない（leave no one behind）なかで、2030年までに、持続可能でよりよい世界を実現しようとするものである。一介の社会学者としては、権威ある機構が定めた目標や、答えの定まった問いなどに、自らも進んで取り組んでみたいなどは微塵にも思わないのだが、このSDGsには深慮遠謀が見出せるのではないかと、勝手に思うようになったりもした。

なるほど〈持続〉は〈合意〉よりも、その実現可能性は高いだろう。〈これまで〉と〈これから〉という意味の時間次元での接続、すなわち〈持続〉は、地球上の誰にたいしても、その可能性は開かれている。〈持続〉とは、時間という制約のなかでの、個体としての生命や身体の再生産そのものであり、環境のなかで生きるということ自体が、生命や身体に知性をもたらす。また、種としての生命は、個体として直面する時間的制約を超えて、

その身体や知性を継承していく。〈持続〉は〈合意〉よりも蓋然性が高い。否、そもそも生命や身体の〈持続〉は、必然的で基本的でなければならないというのが、生存権を基本的人権とする近代文明の自己記述であり、自己評価だったのだろう。

この〈持続〉に比して、〈あなた〉と〈わたし〉という意味の社会的次元での接続、すなわち〈合意〉については、地球上の誰もが、それを拒絶したり無視したりすることは容易にできる。社会（コミュニケーション）は、必ずしも〈合意〉に接続して次の出来事を生み出す必要はない。そして案外、非〈合意〉が、人間や社会にとって大きな問題となる局面は少ないともいえる。あるいは、社会のなかで〈合意〉が問題となる場面は、実はとても限定されているのではないだろうか。〈合意〉がなくても〈持続〉が保証されていれば、人間や社会にとって大きな問題にはならないのではないか。

中国における回族ムスリムの歴史や現在を観察したり、他者の観察をまた観察したりするなかで、〈持続〉が脅かされたときの、あるいは〈持続〉が脅かされるのではないかとの危惧が抱かれたときの、最低限の〈合意〉を求めておこなわれる回族自身の自己規定や自己呈示のあり方は、筆者自身の社会学に対する見方において、〈合意〉ではなく、むしろ〈持続〉への注視を促すきっかけとなった。

目線を変えて、人工知能にまつわる周知のテーマをみた場合にも、〈合意〉に比して〈持続〉のほうが、社会的にも、より一層注視されるべき対象であることが理解できる。すなわち、「人工知能には〈常識〉が欠けている」とするテーマである。

一般に、どのような行動が望ましいと考えられるかという「評価関数」(evaluation function) さえはっきりと決まれば、人工知能はそれを「最適化」できる。人工知能が苦手なことがあるとすれば、そのような評価関数が明確に定まっていない領域である。

人間の思考や行動を観察していると、何が正しいのか、あるいは何が許されているのかとい

うルールが決まっている領域は実は少ない。ルールは、評価関数の一つの（極端な）事例である。人間の生活のほとんどの領域は、評価の基準が曖昧であり、だからこそ「常識」（コンセンサス）が問われる。

つまりは、生きる上での「常識」が問われるような局面が、評価関数を与えるのが最も難しい。逆に言えば、「常識」を支える人間の脳の認知のプロセスが、人工知能研究の今後において最も重要となり、また、人工知能の限界となる可能性がある。オラクル型、ジーニー型、そしてソヴァリン型へとタイプの階段を上がるほど、「常識」は大切になってくるだろう。

注意深く見ると、人工知能が得意なことと不得意なことの間には、ばらつきがある。人間が簡単にできることが、人工知能にはまだできない。一般に、「常識」に基づいて判断するようなことは、人工知能は不得手である。このことは、人工知能がロボットなどに搭載されて家庭や街に出るようになると深刻な問題になってくるだろう。介護など、人手不足の分野で人工知能が活躍するためには、この「常識の欠如問題」を何とかクリアしなくてはならないのである。（茂木 2020: 26-27）

常識は、「生きることの現場からしか生まれないという考え方」もあり、そこには「生命のしなやかさ、頑健性」が現れる（茂木 2020: 40）。いうまでもなく社会学は、こうした常識にかかわる知見をきわめて豊富に蓄積してきたし、〈持続〉や〈合意〉をめぐる議論も、そこに強くかかわってきたのである。

2. 〈持続〉〈合意〉〈予期構造〉 ——N. ルーマンの構成主義的認識論から

社会学には〈持続〉や〈合意〉に関する優れた論考が多い。そのなかで、N. ルーマンの社会システム理論は、ルーマンが自認するように、E. フッサールの現象学の再記述（超越論的哲学から社会理論へ）を通じて構成した理論やモデルから

なる部分が多い。一方、A. シュッツもまた、フッサールの現象学の再記述を通じて現象学的社会学を構想したことはよく知られている。本稿では、西原和久がシュッツの現象学的社会学を批判的かつ発展的に継承するなかで築いた〈意味の社会学〉と、このルーマンの社会システム理論を相互参照することで、〈持続〉や〈合意〉について得られる知見を整理してみたい。そこで、まずはルーマンの〈持続〉〈合意〉〈予期構造〉に関する議論をみていくことにしよう。

(1) 〈過去〉と〈未来〉の接続——意味の時間次元の出来事としての〈持続〉

意味の時間次元の特徴については、ルーマンのリスク論によく説明されている。そこでは、「リスクとしての未来」(Luhmann 1991 (2003): 41-58 = 2014: 49-67) や「時間結合 (時間拘束)」(Zeitbindung) (ibid.: 59-81 = 2014: 68-91) など、決定の帰結 (決定の帰属を通じた、リスク/危険という区別) に対する、時間の作用が重視されている。特に、決定に関連して「現在」とのかかわりが重要なこと、すなわちリスクとは、本来的に知り得ないはずの「未来」について「現在」の時点で描写することであり、この含意を私たちはもっと汲み取らなくてはならないとされる (小松 2003: 39)。

ルーマンのリスク論が説明するように、意味の時間次元の大きな特徴のひとつとして、「非同時的なものの同時性」というパラドックスがある。ルーマンは、時間ゼマンティック (Semantik) の変遷のなかで、特に「現在」が「同時性」として「同時的」(gleichzeitig) に捉えられるようになっていることに注意を向ける。「歴史的に見ると、時間はしだいにまた、現前しているものと不在のものという差異との関わりをも弱めてきた。時間はひとつの独自の次元になり、体験と行為について誰が/何を/何処で/何時ということをもはや秩序づけるのではなくて、何時ということだけを秩序づける次元になる。時間は現前と不在に関しては中立的になり、こうして不在のものを、それに到達するのに要する時間に留意することなく、

〈同時的 (gleichzeitig)〉なものとして捉えることができるようになる。こうして、統一的で統一化された時間測定がようやく可能になるのであり、時間の意味論においては、時点のシークエンスもまた、その過去/現在/未来—諸関係から切り離されて、ある過去時点における過去/現在/未来とか、ある未来時点における過去/現在/未来のように、この諸関係に関連づけられるようになる」(長岡 2006: 226)。

ルーマンの社会システム理論から、意味の時間次元の特徴を次のように整理できる。(1) 「非同時的なものの同時性」という「時間結合」にはパラドックスが必然的に含まれる。すなわち、(2) 現在が同時性として捉えられるようになり、現在における決定への未来の依存が高まる。しかも、決定を介した「現在からみた未来」と「未来における現在」との差異は拡大し、未来の規定不可能性は、それぞれの現在において下される決定への依存性 (循環的な結びつき) に求められることになる。(3) 時間の自己言及のなかで、現在の変化に応じて、現在の「地平」である過去や未来も変化する。(4) このような時間の把握によって、近代以降の社会では、複雑な時間の観察 (構成) が可能になっている (Luhmann 1991 (2003): 41-45 = 2014: 49-54)

(2) 〈あなた〉と〈わたし〉の接続——意味の社会的次元の出来事としての〈合意〉

一方、意味の社会的次元の特徴は以下のように説明される。(1) 人間の社会性が問題になる。すなわち、自分自身が観察者であり、同時に、他者をその観察者 (自分自身) を観察するものとして捉える。それゆえ、他者は単なる事象ではなく(「これ」と区別される「それ」ではなく)、むしろ、あなたがわたしのためになすべきことをあなたがなすことによって、わたしはわたしのなすべきことが何であるかを考える「自己論理」(オートロジー) のなかに、「わたし (自己) / あなた (他者)」が包まれている。(2) この世界は、わたしとあなたの「二重の地平」にあり、「二重の不確定性」(ダブル・コンティンジェンシー) のなかで秩序づけ

られる世界である。(3) そこでは、自己と切り離された他者を詳しく分析してみても、あまり多くのことはわからない。むしろ、わたしのことを観察している他者のことを観察することで、自分のなすべきことが発見される世界である(Luhmann 2002 = 2013: 175 = 2007: 299)。

(3) 時間次元と社会的次元の意味の交叉——先鋭化する非〈合意〉

雲南回族ムスリムの事例でいえば、「自己(回族)／他者(漢族)」といった、意味の社会的次元の差異を越えて両者を接続し、共生を図っていかうとするうごきがある。歴史的にも現在のにも、社会的次元の差異は、多くの対立や困難をともなってきたが、共有可能な価値や思想、利益などを掲げて、合意の先取りを抗事実に試みるなかで、回族は、漢族やその背後にある国家などとの共生を模索してきた。

時間次元と社会的次元の意味が交叉することで、世界は一層複雑にうごいていく。回族が現時点にて構成する「過去／未来」は、それが起点となって次の「過去／未来」へと接続していく。しかも、現時点で予測する現在の未来と、現時点での決定を契機に未来において現前化する未来的現在とが、まったく同じであることはありえない。同様のことは漢族のなかでも生起する。それゆえ、回族と漢族が交叉するとき、それぞれの時間次元の持続のなかで現前化する出来事は、社会的次元の差異に呼応して、一層異なるものとなる。このような状況で、両者が〈合意〉をみる場面があったとすれば、それは非蓋然的でなかなかありえないものが、現実に生じたものとして観察できる。うごきの場がもつ深奥である。

先のリスク論でいえば、ルーマンは、リスク／危険の区別に応じて、「決定者」(Entscheider)／「被影響者」(Betroffene)を区別した(Luhmann 1991: 111-134 = 2014: 124-147)。この区別は、意味の事象次元ではなく、主に社会的次元にかかわっている。あらゆる決定において、決定者と被影響者(決定に参加しておらず、決定結果を甘受するほかない人びと)の2つの立場が

生み出される。決定者がある時点に下した決定による将来の損害の可能性は、決定者にとってはリスクとして現象するが、被影響者にとっては自分たちが被ることになるかもしれない危険として現象する。決定者と被影響者という社会的次元の差異は、同じひとつの出来事に対する異なった意味づけを惹起し、将来の損害の可能性に対する人びとの働きかけや社会的連帯についての異なった形式を発展させていく(小松 2003: 47-49)。決定者と被影響者のひとつの出来事への異なる対応は、出来事のレベルでの自己言及、すなわち「基底的自己言及」(basale Selbstreferenz)(Luhmann 1984: 600-601 = 1995: 807-808)から説明される。以前の出来事と以後の出来事の時間次元における接続は、以前の出来事が条件となり次に接続する作動の可能性を限定することで可能になる。この出来事レベルでの時間次元における不可逆性の内容に関しては、社会的次元である自己と他者の間で、必ずしも意見が一致する(合意する)わけではない。ここには、「非同時的なものの同時化」という「時間結合」が観察されると同時に、社会的次元において先鋭化する緊張関係も観察される(小松 2003: 47-52)。

3. 選択構造としての社会構造 ——〈合意〉することよりも 〈持続〉することに向けて

社会構造が、社会学における最重要概念のひとつであることは、いうまでもない。この社会構造を選択構造として捉え、〈合意〉することよりも〈持続〉することに力点を置いた機制であることに注視した場合、どのようなことが新たに説明できるのだろうか。

ルーマンは、人間の意識の注意範囲(知覚と情報処理のための潜在能力)は限定されており、体験と行為を十分に調整することはできないという。また、意識のなかで生じる出来事(思考や感情など)は瞬間的で不安定であり、意識に頼った社会的一致は偶然に左右されてしまうという。もし、体験と行為の合致を、信頼のできる蓋然性の高いもの

にしようとするならば、その都度、個人の体験の予期地平が付加されて、行動が予期を介して調整され、安定化することが必要になる。そのうえで、相互に一致しうる行為の数、すなわち選択可能な行為のレパートリーが相当数用意されなければならない (Luhmann 2008: 28 = 2015: 24)。

個人の体験は、他の諸可能性に対する参照へ複雑かつ偶発的に開かれている。複雑であるのは、現実化される以上の諸可能性が常に示されているからであり、偶発的であるのは、一方で体験の他の可能性を挙げるのが、他方でひとつの挙示された体験が生じるとの予期が欺かれる可能性をもたらすからである。複雑性と偶発性は、換言すれば、予期がもたらす過剰要求とリスクのことである。より高度な選択性を保つためにも、複雑性と偶発性を除去することはできず、むしろ、行動にとって耐えうる負荷にまで変形するしかない。たとえばリスクは、体験の予期そのもののうちに溶かし込んでしまう。つまり、「これまでは常にそうだった」という想起によって予期を確認すること、また、この予期と機能的に等価である当為の相で、すなわち「この予期は実現されるべきである」として、予期を当為と象徴化することである。こうして、想起による予期の確認と、当為による予期と現実の象徴化（結合）として受け取られたものにより、諸可能性の氾濫のなかに一つの選択的構造が据えられる。個人が想起によって予期を確認することは、あらゆる確かさの先行条件となり、予期が実際に満たされることの確かさよりも重要になる。自分が何を予期しうるのかを知っていれば、その予期が実現されるか否かに関する不確実性に、相当程度耐えることができる (Luhmann 2008: 28-29 = 2015: 25)。

こうした人間の体験を特徴づける複雑性と偶発性は、行動の一般的な問題状況である。それゆえここからは、体験を処理し、自身を動機づけ、情報処理し、学習したり（しなかったり）するための独特の構造が発展していく。すなわち、①「予期の再帰化」（他者の予期を共に予期すること）を通じて多数の行動の選択肢が確保されるときも、この選択肢の動機づけを通して〈合意〉に要

する時間が節約される。さらには、〈合意〉の力を持つ規則やシンボルを抽出して行動予見が可能になり、規則やシンボルの学習により、状況に応じた予期の形成が可能になる。②こうした予期構造の統一的統合（他の人間を誤って解釈するというリスクの吸収＝双方による適切な予期）は、脱人称化された、当為の形式で設定された規則（象徴的な略語による定位）によって促進され、他者の予期の「共予期」に至る。ここで予期の確実性が保証され、人びとは適応を自身の状態への反応として捉え、容易かつ速やかに実行できるようになる。③一方、体験の予期が外れる実際の出来事に対しては、自身に対する相手の予期を学ぶ／学ばない、あるいは相手に対する自身の予期を変更する／変更しないことを通じて処理できる (Luhmann 2008: 30-36 = 2015: 27-31)。

ルーマンは、学ぶ用意のある予期を「認知的予期」、学ぶつもりのない予期を「規範的予期」と呼ぶ。学ぶか学ばないか（学習を通じて予期そのものを修正するか否か）の決定は、生じうる予期外れとの関連で「先取り」され、予期が外れた場合にも、ただちに有意義な行為をおこなえるよう準備する。なかでも規範的予期は、自らは学ばず、変更しないが、自身の予期は相手に予期され学ばれるべきであるとの権利を通して自身を動機づけ根拠づける。この権利は、予期外れを予期とは関係のない出来事として「説明すること」、あるいは、傷つけられたにもかかわらず予期そのものの保持を表現する「サンクション」によって支えられる。予期の〈持続〉は、予期に〈合意〉することよりも重要なこととされる (Luhmann 2008: 36-43 = 2015: 32-38)。

ところがさらに複雑なことに、こうした日常の行動を調整する規範的予期の十分な多様性は、むしろ、社会を統合するのではなく、規範化のコンフリクトや、二重の予期外れという社会統合の問題を生み出す。確かに規範性は、社会統合において、予期の時間次元（これまで／これから）での〈持続〉には役立つが、社会的次元（自己／他者）での〈合意〉には役立たない。そこでルーマンは、社会的次元での〈合意〉に寄与する予期のメカニ

ズムを、新たに「制度化」（行動予見の安定化であり、先の人工知能でいうところの〈常識〉に近い。ただし、ここでの〈常識〉とは、社会学がよくいうところの〈疑うべき常識〉としてのそれであろう）という概念で裏打ちする。そしてこの議論から、制度化が〈合意〉の儉約のうちにあることを主張する。すなわち〈合意〉は、体験の予期のなかで先取りされた想定として働くことで、具体的に問いただされる手間をかけずに達成される。制度化は、特定のテーマの選択と有意味に行うための状況の定義とを前提とし、関与者の役割を代替選択肢の不在（自分自身に対して向けられた自明性）の下にあてがい、行動負荷の軽減とリスク回避を動機づける（Luhmann 2008: 43-46 = 2015: 39-43）。

こうした制度化の特徴は以下になる。①体験の予期が規範的か認知的かの選択が不明確であること、②行動の代替選択肢を伴わない（選択にかかわるリスクがほとんど存在しない）自明性に依拠すること、③予期外れの事例に対して用意がなく（逸脱という意味において認識されず、したがって逸脱の特化や分類化はなされない）、逸脱者は特別な逸脱役割に固定されること（よそ者や無粋者、学習能力の障がい者などとみなされ、差別をともなうことが多くみられる）で、逸脱行動に対する予見が安定化すること、④制度化による社会的次元の〈合意〉は、複雑な社会では小さな社会システムに限られるため、より高度のリスクにも適応し、広く〈合意〉が得られるよう、制度はそれ自身のメカニズムを言語的に表現された特殊な規範的予期（法）にも適用していく（Luhmann 2008: 46-55 = 2015: 43-52）。

4. 西原和久の〈意味の社会学〉——〈発生の社会学〉の展開とともに

(1) 西原和久〈意味の社会学〉のアリーナ——シュッツ現象学的社会学の再考から

西原和久『意味の社会学——現象学的社会学の冒険』（1998年）では、シュッツの現象学的社会学の再検討を通じて、「相互行為論的還元」や「間

主観的還元」ないしは「間身体的還元」と呼ぶる視点から、人間や社会がもつ関係性と共同性に目を向ける。「事実として人は一人で生きるのではなく、相互に支えあい相互に依存しあいながら共同を生きる社会的な存在」であることを見据えながら、身体・生命の秩序や相互行為が成り立つための前提、条件、基盤など、人間と社会を成り立たせる基底の根拠を問い、社会学の基本概念や基礎理論の再考を試みる（西原 1998: 6-7）。

関係性や共同性といった人間性への問いかけは、主観性や主体性の生成や形成の基盤に対する問いかけへと連なっていく。西原の〈意味の社会学〉では、相互主観性（間主観性）や間身体性への着眼から、個々の意識主観の「脱中心化」が進められ、関係性や共同性といった人間性が問われる。すなわち、身体レベルを含む相互主観性への基底的な問い（主観性の生成問題）を、発生論的な相互行為レベル（生活世界における言語以前の、主客未分的、間身体的なレベル）にまで深めた問い直しから試みている（西原 1998: 31-33, 38-39）。

西原は、シュッツ現象学の特徴を捉える上で、シュッツが企てたフッサールへの批判に着目する。すなわち、フッサールが『デカルト的省察』で「間接呈示」を用いておこなった主張——「超越論的自我」が他の身体を介した「自己移入」により「類比的統覚」をおこなうことで他我認識が論証されるという、超越論的に還元された領域での「他我認識」や「超越論的主観性」をめぐる主張——に対する、シュッツの批判である。シュッツは、フッサールのいう「他者の主観性の統覚」が可能になるためには、他者が「すでに所与の通常の規定性の基準に従って類型化されていること」が前提とされねばならないという（Schutz 1966: 66）。そうした「共通で客観的な世界の構成」は、「自他のコミュニケーションの可能性」に基づく「我々関係」を前提とするのであり、フッサールが「現象」とも語る「超越論的主観性」では、そうしたコミュニケーションはそもそも不可能だと、シュッツは批判した（ibid.: 76）（西原 1998: 50-51）。

西原によれば、シュッツは超越論的主観性からではなく、むしろ内世界的・日常的な生活世界に

住まう人びとにおける間主観性（人びとのコミュニケーションの可能性）を議論の出発点にして、そこでの沈黙の歴史と意味構造の明示化こそを「現象学的な構成分析」にのっての正統な課題とした（Schutz 1966: 84）。すなわちシュッツは、人びとにのっての自明性の基盤を問いつつ日常性の構造を問うこと、「通常の規定性」「類型化」「我々関係」「コミュニケーションの可能性」等々といった一連の視点から、「私——によって——客観的なもの——として——受けとられている世界」を、そのより基底の「我々関係」などにまで遡ってさらに探求することを課題とした（西原 1998: 51-52）。

西原は、シュッツ現象学的社会学の未整理な用語・方向を整理するなかで、現代社会学理論における自らの〈意味の社会学〉を築いていく。

なかでも特に、現象学が問題にした知覚（作用、対象）場面での意識・主観性のありようを念頭に置いて、シュッツ自身が問題にした内的「持続」（*durée*）を中心に、行為の意味の問題に焦点化しつつ、「体験」（*Erlebnis*）と「経験」（*Erfahrung*）について整理する。すなわち、シュッツは『社会的世界の意味構成』で、意味を反省的・回顧的な視線において捉えているという（Schütz 1932: 49f.）。そこでは、体験それ自体が有意味なのではなく、いまこのようにある反省的なまなざしの当てられた体験が自己解釈的に捉えられて「経験」として有意味化されている。その一方でシュッツは、体験（行為）それ自身のもつ意味や（Schütz 1932: 12ff.）、言語以前の身体的な問題圏（Schutz 1962: 210, and *passim*）、あるいは前述語の領域、そして身体知のような「すでに手中にある知」（*knowledge in hand*）についても語っている（Schutz 1970: 143）。「持続」や「体験流」を核にした経験と体験をめぐる問題系である。西原はこれらを「超越論化の問題系」ないしは「意識・主観の問題系」と名づけ、そこに見られる二重性を「経験／反省」と「体験／身体」の問題圏として、分析の横軸に設定した（西原 1998: 53-56）。

他方でシュッツは、「我々という基底の関係」の先住性を強調する視点も持っている（Schütz

1932: 112）。「孤立した自我」である我（主観性）と、「基底的关系」である我々（間主観性）とでは、後者の「我々」という間主観的なあり方の先住性が、より基底にあって、そこから「我」が生成してくるという発生論的な道筋が描かれているという。西原はこれを「間主観的自覚化の問題系」ないしは「相互行為の問題系」と名づけ、そこに見られる二重性を「主観性／自我」と「間主観性／社会」の問題圏として、分析の縦軸に据えた（西原 1998: 55-56）。

こうして西原は、「シュッツにおける二つの二重性」をクロスさせて、IからIVの問題圏を浮き彫りにした。すなわち、「経験／反省」と「主観性／自我」がクロスする「I：主観的／主知主義的領域」、*「体験／身体」と「主観性／自我」がクロスする「II：主感的／主情主義的領域」、*「経験／反省」と「間主観性／社会」がクロスする「III：間主観的／言語文化的領域」、*「体験／身体」と「間主観性／社会」がクロスする「IV：間身体的／間生体的領域」*である（西原 1998: 56）。

西原によれば、初期シュッツは、微小知覚や情動を論じるIIの領域にも言及しながら、反省の意味からなるIの領域を主題にしていたが、渡米後の後期シュッツは、次第にIIIやIVの領域に積極的に論及し、次第にIVの領域にある基底的事態の重要性を重んじ、そしてIIIやIVからIの領域への生成を問題にする道を切り開きつつあったという（西原 1998: 57-58）。

たとえばシュッツは、言語的類型化——「類型化の宝庫」としての日常言語を用いる「社会的に是認された類型化と関連性の体系」が、個々の集団成員の「私的な類型化と関連性の体系」を生む場として（Schutz 1964: 238）積極的な発言をしているという。それは、言語文化的、社会文化的な規定性ないし存在拘束性の問題であり、IIIの領域の間主観的領域からIの主観的領域を睨んだ議論である。西原は、シュッツはこの地点だけに留まったわけではなく、ここからIVの領域における、所与の事態のより基底の層への問いへと向かったという。それゆえシュッツによる生活世界は、単なる「所与」ではなく、むしろ「コミュニケーション

ンの基盤」などの問題圏を含むことになる。コミュニケーションは、それ自身が基づけられている社会関係をすでに前提にしていると考えられるわけである（Schutz 1966: 38）。こうした社会関係としてシュッツは、音楽における〈相互同調関係〉（mutual tuning-in relationship）と、問いと答えの問答形式における対話の例を出す。前者の〈相互同調関係〉は「概念図式によらないコミュニケーション」であり、後者は言語的コミュニケーションにおける「動機連関」の問題だとされる。こうして、IVの領域では、「時間」（と空間）の共有に基づく「基底的な我々関係」の先住性、いいかえれば「ともに時を経る」（Zusammenaltern）、より基底の相互行為の先住性が問題化されることになる（西原 1998: 61-64）。

(2) 〈意味の社会学〉における〈発生の社会学〉の展開

西原の〈意味の社会学〉では、先のII、IIIの領域を含めた「意識」「主観性」の論点を活かしながら、IVの間身体的／間生体的領域において「基底から眺む思考」が展開される。〈意味の社会学〉の可能性は、「シュッツにおける二つの二重性」の物象化の理路と生成過程の解明——主観性や意味のより基底からの解明や、「類型化」（物象化）と「関連性」（relevance）の解明といった、意識の物象化や「発生」論の視圏にかかわる問題圏——に見出されている。すなわち、議論の出発点に「間生体的諸力論」を置き、そのうえで「発生論的相互行為論」を通じた〈発生の社会学〉を展開していく。そこでは、時間性と共同性（関係性）に着目して生成を問う。たとえば類型化について問題になるのは、その物象化的な生活世界の記述と、その生成の解明である（生活世界は、適切には「生世界」と捉えるべき「生」への発生論的な問いにも開かれた、「意味生成の文脈」にかかわるきわめて重要な概念だと、西原は主張する）。それは、より基底の発生論的相互行為から私的・公的な意識の生成を問うものである（西原 1998: 63-66, 74）。

このIVの発生論的問題圏での主観性への問い

は、それを可能にする間主観性の問題へと行き着く。意味への問いは、意味の生成を問うことになる。間主観性、生世界、コミュニケーションの可能性といった、これら意味生成の文脈での問いは、西原によれば、シュッツの音楽論にも見ていくことができるという。言語を用いる相互行為（コミュニケーション）の手前にある、あるいはそのより基底にある「概念図式とは結合していない」音楽のコンテクストを引き合いに出しながら、「いかなる種類のコミュニケーションにも含まれている非概念的な局面」である「コミュニケーション以前の社会関係」といった、いわば生きられる前社会性を、シュッツは「相互に波長を合わせる関係」（相互同調関係）として示した。その経験が「あらゆる可能なコミュニケーションの基盤にある」というわけである（西原 1998: 77-78）。

(3) 〈発生論的相互行為論〉の視座①——〈相互同調関係〉

〈発生の社会学〉を核とする西原の〈意味の社会学〉では、〈発生論的相互行為論〉を議論の出発点に置く。そこでは、主観性・主体性の形成について、社会形成、規範形成、相互行為形成などから問い直し、関係や間主体的な地平から出発する。生命体・動物性としてのヒトの生体レベルに比肩できる発生論的な生の交互実践の現場に立ち戻ることを企図し、言語をもつ人間が、歴史社会的現在を生きぬく、その前提・基盤・条件などを指示しつつ、同時に人間諸行為の間身体的な過程や集積でもある社会を問い直すための基底的地点を見据えようとする。相互行為の基底は生体間の関係であり、これを西原は「間生体性」（inter-living-body）の関係と呼ぶ。そのうえで、自他関係、我汝関係の、自と他、我と汝は、それぞれの間生体的関係の第一項と第二項と呼んで、コミュニケーションが可能になるための基底的条件を探るうえで、下記の問題圏を挙げている（西原 1998: 83-84）。

第一に、シュッツのいう〈相互同調関係〉——「可能なコミュニケーションはすべて、コミュニケーションの発信者と受信者との間の相互に波長

を合わせる関係 (mutual tuning-in relationship) を前提にしているように思われる」(Schutz 1964: 177) —にかかわり、リズムないし共振など、間生体的力で基底的な結合の力にかかわる問題圏である。たとえば音に代表されるリズム・振動は、間生体的諸力の基底にあり、その第一項と第二項を共振させ、共鳴させ、同期化し交響しあう関係をつくりだす。ここにはさらに、エロスあるいは情愛といったエロスの問題圏もかかわるという。エロスを情動の基本的な力として、さらに他者・他物の表情性の感得も射程に入れて、やや広義に「意味としての情動」を措定する。間主体的関係の第一項と第二項は、エロスによっても引き付けあい、交感し、共感しあう関係をつくりだす (西原 1998: 85-86, 102)。

この「相互に波長を合わせる関係」〈相互同調関係〉を、シュッツは自他の外的・内的時間流の共有と関連させて論じていると、西原はいう。「演奏者と聴き手は、音楽過程が継続している間、お互いに『波長が合って』(tune in) おり、同じ内的時間の流れを共に生きつつ、共に時を経ている (growing older together) のである」(Schutz 1964: 174-5)。「『我』というものと『汝』というものが生ける現在 (vivid presence) においてひとつの『我々』として両当事者に経験されるのは、まさにこの相互に波長を合わせる関係によってなのである」(ibid.: 161)。「内的時間のうちに他者の諸経験の流れをこのように共有すること、すなわち生ける現在をこのように共に生きていくことは、……相互に波長を合わせる関係つまり『我々』経験を構成しており、この経験があらゆる可能なコミュニケーションの基盤にある」とシュッツは明言する (ibid.: 173) (西原 1998: 102)。

西原は、シュッツが、自他の意識流の同時性の論点において「我々関係」を特徴づけ、意識構造の同型性を語るさいの論拠として用いてきたと述べる (Schutz 1964: 161)。シュッツは「相互に波長を合わせる関係」は、「特定の時間次元において同時に共に生きる可能性のうちに起源する」(ibid.: 162) と述べ、「波長を合わせる関係の理論を精緻化する」ことを今後の検討課題としたと

いう (ibid.: 178) (西原 1998: 102-103)。

西原は、「音楽の共同創造過程」にみる〈相互同調関係〉や、「状況の定義」および日常生活の「多元的現実」のなかには、「内的持続の流れ」(の融合・統一) といったシュッツ現象学的社会学の鍵概念を容易に見いだすことができるという。シュッツは「協調 (cooperation) と反目 (antagonism)」のなかで、たとえ反目している場合であっても、人びとは、共同性という間主観的な状況のうちに共に結びつけられていることを、音楽の共同創造過程に見出した。このことはさらに敷衍されて、コミュニケーションを可能にする基底として見出すことができるというわけである (ibid.: 199) (西原 1998: 104-105)。

(4) 〈発生論的相互行為論〉の視座②——〈類型化〉と〈関連性〉

西原の〈発生論的相互行為論〉では、〈相互同調関係〉の問題圏に加えて、〈類型化〉と〈関連性〉にかかわる問題圏が挙げられている。対象の認識・知覚では、他との差異にもとづく分節化＝類型化がおこなわれること、あるものを「～として」同定する行為は、それ以外のものを区別・否定する意味的な差異化行為であり、行為は、ひとつの表出・表現として、それ自体が類型化的分節の遂行であることに対応した問題圏である。西原は、本来的には連続体であるものに働きかける行為は、間生体的関係の第一項と第二項との間にあっては、他者の分節と自他の差異化につながる力であり、こうした関係行為それ自体のなかで類型化的な分節線が引かれること、こうした類型化的分節の能力は、生体の基底的な実践力能であることを強調する (西原 1998: 86-87)。

それゆえ西原の〈意味の社会学〉では、〈類型化〉における〈類型〉は、「反省以前の」な有意味性として、〈意味〉とほとんど重なり合う。シュッツの現象学的社会学では必ずしも明確ではなかった部分である。西原はシュッツが無意味な behavior と意味付与的な act, action との間に、有意味で自生的な conduct を措定していること、そうした問いの視角においては、〈類型〉ないし〈類

型化〉などとの関係が暗示されていると考えた。すなわちシュッツは、〈類型〉という形の「手持ちの」利用可能な知の集積との関わり合いで対象を際立てつつ、類型化的な再認の総合を行うことを、〈意味〉現象の核心事態として捉えており、その限りで〈意味〉は〈類型〉とほとんど重なり合うという。そうした類型化的分節の能力は、生体の基底的な実践力能であると、西原は強調するわけである（西原 1998: 116）。

さらに西原は、シュッツが〈類型化〉を拡張して〈関連性〉へと至ったことに注視する。西原は以下のようにいう。シュッツによれば、体験を有意義化する作用は、過去の体験を現在の体験からみることであったが、後者の体験自体もまたつねに流れている。意味現象には時間性＝歴史性がまわりつく。こうした時間の経過には、体験に向けられた注意の推移に加えて、体験を経験化し集積する時間的過程がある。ここでシュッツの意味概念はさらに拡張される。すなわち「ある体験の特定の意味とは、この体験をあらかじめ与えられている経験の全体連関（Gesamtzusammenhang der Erfahrung）のなかへ組み入れること（Einordnung）である」（Schütz 1932: 104）。ここで「意味」とは「再認の総合（ibid.）という機制をまわって成立する。シュッツのいう「経験の全体連関」とは、前期シュッツでは「経験の集積（Erfahrungsvorrat）」、後期シュッツでは「知の蓄積（stock of knowledge）」などと語られるものであり、対象的世界に対する「経験図式」「解釈図式」として機能し、「その世界を秩序づける」ものだとされる。「意味」はまなざしにおいて捉えられ、同時に経験や知の蓄積との関わり合いにおける一種の解釈において生成する。西原はここに、シュッツによる意味生成の機制を見ている（西原 1998: 115-116）。

西原は、シュッツのいう〈類型化〉と〈関連性〉の体系は、「類型化的综合」を契機に更新されると考える。すなわちシュッツは、「以前の経験の沈殿物である〔手許の〕利用可能な経験の集積を引き合いに出すことによって答えることができるのは」、ある対象が「何」であるかだけであり、「何

ゆえに」それに関心が向かうのかを説明するものではないことに、頭を悩ませていた（Schutz 1962: 227）。そこでシュッツは、この「諸関心システム」の問題を解決するために、〈類型化〉と〈関連性〉の接続を試みる。すなわち、「個人が表明し行なう具体的な諸々の選択、態度、決定、関与を説明する……基底的な選定の原理」（Natanson 1962: XL）を〈関連性〉と名づけ、主題化に関わる主題的関連性、解釈に際しての主題と知の集積にかかわる解釈的関連性、動機づけの際の動機的関連性を論じたのである（Schutz 1966: 123ff. ; Schutz 1970: chap.2）（西原 1998: 116-117）。

西原は、行為者の関心の機制（選択の原理）をめぐって論じられた関連性それ自体が、さまざまな準位レベルで機能するものとして考察されなければならないという。主観的、解釈的、動機的な関連性など、いずれにせよ関連性には行為者にとって「固有内在的な関連性」（intrinsic relevance）と「賦課的な関連性」（imposed relevance）があるとされる（Schutz 1964: 123-9）。とくに「根本的な賦課的関連性」（fundamental imposed relevance）（Schutz 1970: 181）は、あらゆる他の関連性がそれによって生起してくる基底的な関連性とされ（ibid.）、「身体」や「リズム」（季節変化といった外的時間のリズム、呼吸や心臓の身体時間のリズム、誕生・成長・死など「時を経る」内的時間のリズム）などが例示されている（西原 1998: 106-107）。

こうして、「関連性の体系が……何が一般化的類型化の基層とされねばならないのかを決定する」（Schutz 1962: 237f.）。したがって、ある関連性の体系が一定の類型化の仕方を規定しており、「関連性と類型化の体系」（Schutz 1964: 237f.）の相違が多様な意味領域を生み出している。これをいま多元的現実との関係で言い表せば、狭義の日常生活には日常生活のプラグマティックな「関連性と類型化の体系」があり、科学的考察の世界にはそれ固有の「関連性と類型性の体系」があるというわけである（西原 1998: 117）。

5. 西原和久〈意味の社会学〉にみる 〈持続〉と〈合意〉——その後の 〈トランスナショナル社会学〉〈歴史社会学〉 〈マイノリティの社会学〉へ

西原和久の〈意味の社会学〉では、〈持続〉と〈合意〉は、生体ないし間生体的関係のなかに、コミュニケーションを可能にする基底的事実がらとして取り込まれている。たとえば、我々関係は、時空を共有する対面的な社会関係と捉えられ、そこでは身体の動きを含む一定の記号を介しながら、他者の体験流（他者の意識の流れ）が同時的かつ前人称的に体験されるという。意識の流れが〈同一関連性〉や〈同一時間構造〉にあることを根拠にして、諸意識の同型性を論じるわけである（西原 1998: 121-122）。

他方、筆者自身の雲南回族ムスリムのフィールドワークを通じて感じたのは、〈持続〉の蓋然性と、〈合意〉の非蓋然性であった。これをルーマンの構成主義的認識論からみれば、次のように説明できた。すなわち、以前の出来事に対する以後の出来事は、時間次元において不可逆的である。以後の出来事は、常に以前の決定によって惹起されるが、そうした前後の出来事の内容に関しては、社会的次元である自己と他者の間で必ずしも意見が一致するわけではない。ここには、決定を通じて過去と未来が現時点において同時化する時間結合（持続）を観察できるのと同時に、社会的次元においては、意見の相違から緊張関係（非合意）が先鋭化することを観察できる。西原の〈意味の社会学〉と、ルーマンの構成主義的認識論とは、〈持続〉と〈合意〉の意味するところにおいて、まさしく非〈合意〉的であり、なおかつ、平行線をたどりながら両者は〈持続〉する。

西原は〈意味の社会学〉を通じて、人間と社会を成り立たせる基底の根拠を問うた（西原 1998: 6-7）。こうした西原の人間学から学ぶことは多い。筆者自身が、人間とはどのように説明できるかを考える際、他とは区別された、宇宙のなかでの時間的有限性をもった、唯一の自己への準拠（自己意識）は、やはりなかなか否定できるものではな

い。自分はいざ知らず、他者からみれば、やはりわたしは、わたし自身に準拠しているように観察されるだろうからである。その一方で、意識的・主観的に感じたり経験したりする質感＝認識のメカニズムを意味するクオリア（qualia）は、「外界の事物を直接表現する『感覚的クオリア』（sensory qualia）と、志向性（intentionality）を内包した『志向的クオリア』（intentional qualia）」（茂木 2020: 107）から構成され、「感覚的クオリアによって外界の基本的な様子が表現されて、それに対して志向的クオリアでさまざまな『解釈』や『意味づけ』が行われていく」ことを説明している（茂木 2020: 108）。つまり認識のメカニズムそのものには、身体性をともなった生きることの実感や理解もまた、他者への志向性が基底にあることを意味している。

それゆえにこそ筆者は、西原がいう〈相互同調関係〉や〈同一関連性〉については、社会（コミュニケーション）の基底としてではなく、むしろ、一定の条件のもとでの出来事として捉えた際、どのような理路を確保できるのかに強い関心を抱く。すなわち、〈相互同調関係〉や〈同一関連性〉を蓋然化する上で、どのような条件が必要なのか。身体性をともなった生きることの実感や理解を蓋然化するためには、何が必要なのか。このような問いかけである。

〈相互同調関係〉や〈同一関連性〉に支えられた〈親密な関係〉など〈パーソナルな関係〉は、確かに深化はすれども、それが増大し、社会で一般化されるならば、かえって人びとに対する過剰要求となり、人間や社会は〈持続〉できないかもしれない。

こうした問いや思考実験からは、〈相互同調関係〉や〈同一関連性〉は、常に現実に現前化する必要はなく、むしろチャンスや潜勢力として常に安定してそこにあり、わたしたちの誰に対しても開かれている、社会構造（選択構造）として捉えられるのではないかという視点が得られる。そして、西原のその後の〈トランスナショナル社会学〉や〈歴史社会学〉〈マイノリティの社会学〉を通じての思考実験は（西原 2016, 2018, 2020, 2021a,

2021b),まさに西原のいう〈相互同調関係〉や〈同一関連性〉が持続的な選択を可能にする社会構造として存立するための条件を探求する壮大な航海だったように思えるのである。

注

(1) ルーマンの議論にならって、個人化の特徴を「パーソナルな関係の深化」と「インパーソナルな関係の増大」から捉えた上で、みていくことにしよう。

ルーマンは、仮に社会を、貨幣というコミュニケーション・メディアに媒介された経済システムを中心に据えて観察すると、個人は他者とのあいだでインパーソナルな関係しか持ちえず、社会は圧倒的にインパーソナルなものとして立ち現れるという。その一方でルーマンは、経済は生活のさまざまな要素のひとつに過ぎず、個人はみな、パーソナルな関係を強化する可能性——個人が最も個人的なものとなすことからの多くを他者に伝え、他者によってもそれが認められる可能性——に開かれていることにも注意を促している。すなわち近代社会の個人は、「インパーソナルな関係の増大」と「パーソナルな関係の深化」の双方の強化のなかに位置づけられるというわけである (Luhmann 1982: 13-15 = 2005: 11-12)。この「インパーソナルな関係の増大」が可能なのは、わずかな役割特性 (警察官、女店員、電話交換手など) だけで相手を判断する場合でも、コミュニケーションが首尾よくおこなわれるからだという。あらゆる個人の活動は無数の他者に依存しているが、本来的に非蓋然的でコンテンツジェントな (別様の可能性に開かれた) 他者に対して、「インパーソナルな関係」の信頼は、人物にかかわる具体的な知見に裏付けられるのではなく、文脈を超えて一般化された役割特性やその規範に支えられている。他方、「パーソナルな関係の深化」では、「インパーソナルな関係」のような多様性の拡張や増加が単純になされると、むしろ各人は「過剰要求」という限界にぶつかってしまう。したがって「パーソナルな関係」では、その増大ではなく深化がおこなわれ、この深化を通じて、人間の個人的で唯一無二のどんな性質についても重要になる社会関係が可能になると、ルーマンは説明する。この社会関係は「人と人との相互浸透」すなわち「親密な関係」として概念づけられている (Luhmann 1982: 13-15 = 2005: 12)。

ルーマンは「親密な関係」の特徴として、パーソナルなものをコミュニケーションから取り去ることが許されないこと、すなわち、相手にかかわることがらに無関心を表明してはならないし、相手からの個人的な問いにも答えないわけにはいかないことなどをあげている。そして次のような理由から、「親密な関係」は、その必要性がますます高じているという。すなわち、人間を自他ともに「個人」として観察するなかで、その人の固有の差異は、その人自身に引き付けて解釈しようとする誘因を強めている。自分自身の体験や行為に準拠して自らを構成し、その意識の存在を知るには、名前、年齢、性別、社会的地位、職業といった、ありふれた社会的カテゴリー

だけでは十分ではない。個人は、環境と自らとの差異において、またそうした差異を他者とは違って取り扱っている仕方において、確証されなければならない。それゆえ同時に並行して、社会もまたきわめて複雑になり、見通しにくくなっていく。だからこそ、なお理解可能であって、熟知され、打ち解けることのできる「親密な関係」が必要になってくるというわけである (Luhmann 1982: 14-18 = 2005: 13-16)。

参考文献 (アルファベット表記順)

- 小松丈晃, 2003, 『リスク論のルーマン』勁草書房。
 Luhmann, Niklas, 1982, *Liebe als Passion*. Suhrkamp. (= 2005, 佐藤勉・村中知子訳『情熱としての愛』木鐸社.)
 Luhmann, Niklas, 1984, *Soziale Systeme: Grundriß einer allgemeinen Theorie*. Suhrkamp (= 2020, 馬場靖雄訳『社会システム』上・下, 勁草書房.)
 Luhmann, Niklas, 1991 (2003), *Soziologie des Riskos*. Walter de Gruyter. (= 2014, 小松丈晃訳『リスクの社会学』新泉社.)
 Luhmann, Niklas, 2008, *Die Moral der Gesellschaft*. Suhrkamp. (= 2015, 馬場靖雄訳『社会の道徳』勁草書房.)
 茂木健一郎, 2020, 『クオリアと人工意識』講談社。
 長岡克行, 2006, 『ルーマン/社会の理論の革命』勁草書房
 Natanson, M., 1962, Introduction, in Schutz, 1962.
 西原和久, 1998, 『意味の社会学——現象学的社会学の冒険』弘文堂。
 西原和久, 2016, 『トランスナショナリズムと社会のイノベーション——越境する国際社会学とコスモポリタンの志向』東信堂。
 西原和久, 2018, 『トランスナショナリズム論序説——移民・沖縄・国家』新泉社。
 西原和久, 2020, 『現代国際社会学のフロンティア——アジア太平洋の越境者をめぐるトランスナショナル社会学』東信堂。
 西原和久, 2021a, 『日本のグローバル化する社会と意識のイノベーション——国際社会学と歴史社会学の思想的交差』東信堂。
 西原和久・杉本学編, 2021b, 『マイノリティ問題から考える社会学・入門——差別をこえるために』有斐閣。
 Schütz, A., 1932, *Der sinnhaft Aufbau der sozialen Welt*. Springer. (= 1982, 佐藤嘉一訳『社会的世界の意味構成』木鐸社.)
 Schutz, A., 1962, *Collected Papers, I : The Problem of Social Reality*. Nijhoff. (= 1983, 渡部光・那須壽・西原和久訳『シュッツ著作集第1巻 社会的現実の問題 [I]』マルジュ社 ; = 1985, 渡部光・那須壽・西原和久訳『シュッツ著作集第2巻 社会的現実の問題 [II]』マルジュ社.)
 Schutz, A., 1964, *Collected Papers, II : Studies in Social Theory*. Nijhoff. (= 1991, 渡部光・那須壽・西原和久訳『シュッツ著作集第3巻 社会理論の研究』マルジュ社.)
 Schutz, A., 1966, *Collected Papers, III : Studies in Phenomenological Philosophy*. Nijhoff. (= 1998, 渡部光・

那須壽・西原和久訳『シュッツ著作集第4巻 現象学的哲学の研究』マルジュ社.)

Schutz, A., 1970, *Reflections on the Problem of Relevance*, Zaner, R. M. (ed.), Yale Univ. Press. (= 1996, 那須壽・浜日出夫・今井千恵・入江正勝訳『生活世界の構成』マルジュ社.)

首藤明和, 2020, 『中国のムスリムからみる中国——N. ルーマンの社会システム理論から』明石書店.

首藤明和, 2021, 「回族の結婚と「個人化」「親密な関係」「コミュニケーション・メディア」「予期構造」——N. ルーマン構成主義的認識論からの結婚研究に対する新たな問い」『中国 21』(54) 39-64 頁.